

黒人文学の統計的研究

—— Baldwin への一つのアプローチ

(Wright, Faulkner との比較において)

菊池 昭

序

統計学は、大ざっぱに言って先ず現象を量的に記述することを目ざすものといえるのであろうが、しかし統計学に対するこうした原則的な理解だけで、この学問を性急に文学研究に利用しようとするならば、両者はついにその接点を見出すことができない——あるいは少くともほとんど見出すことができないことになるであろう。

なぜならば、文学を創る者としての作者の内面（研究の立場によってこの語の受けとめ方に多少の違いはあるとしても）に対する考察を欠いた文学研究はありえないはずであるが、いま、いわゆる口承文学を一応考慮の外に置いていえば、文学における「現象」的なものとは、つまるところ、作者のこの創造的プロセス（作者の内面的思弁の跡）は一切問わず、ただ出来上ったものとしてそこに提出されている書物——端的には、整理配列された活字、つまり文字の集積のことであるが故に、このとき統計学はこうした意味での文字には関与しえても、「文学」それ自体にはついにかかわりえないということになるからである。

だが、もしいま一步を進めてこうした文字についての数量的な考察が、（作品中の）ある文字——言語の特別に工夫されたあらわれ方、いわばその密度と言ったものに注意を向けさせることになり、あるいはまた文字の特殊な配列の仕方、つまり語句の選び方の顕著な変則性に気づかせることにな

るとしたら、そのときそれはもはや単なる文字の観察とよぶべきものではなくなるであろう。つまりこのとき、「現象」としての文字の観察はいわゆる文体研究の次元にまで高められることになる。

すなわち、こうした明確な目的意識をもってこれを利用するとき、統計学ははじめて文学研究の有効な一手段となりうるのであるが、しかし観察の結果をただ数量的にまとめるだけならば、統計学はこのときでさえも依然として文学研究の最も本質的な部分、つまり作者の内面の考察と直接のつながりを持つことにならない。

しかし、この学問の核心が「数字を土台にして物を考える、判断する」⁽²⁾ということにあるならば、あらわれた「数字をみながら」その数字が作家のどのような精神を反映したものであるかを「判断」することも、この場合当然に可能なことであるばかりでなく、更には必要なこととさえいえるはずである。

この小論の目的は、基本的には統計的方法という数量的データに基づく分析方法が文学研究の手段として用いられるときどのような利点があるか、更にはまた、文学研究の最も本質的な部分の解明のために、得られたデータをどのように役立てるべきか、そうしたことについて一つの手さぐりをしてみることである。

I

次の二つの文は、それぞれどのような印象を人に与えるだろうか。

(1) It was apparent that the sun would soon give up the tremendous struggle it cost her to get to Paris for a few hours every day.

(2) Outside his window he saw the sun dying over the rooftops in the western sky and watched the first shade of dust fall.

(1) Stephen Ullmann, *Language and Style* (Oxford, 1964), pp. 120-1.

(2) 森田優三、『統計読本』(日本評論社, 1970), pp. 2-3.

(1) は James Baldwin (*Giovanni's Room*, A Corgi Book, p. 110), (2) は Richard Wright の *Native Son* (A Signet Book, p. 44) の中の一文である。類似の情景描写という枠だけをはめてほとんど任意に抽出したこの二文を読みくらべてみると、筆者個人としては Baldwin に一種時代ばなれのした浪漫的——見方によっては詩的ともいえる——過剰な装飾性を、そして Wright のものにはそれとまさに正反対の、無装飾直線的な即物性を感じとる。だが問題はこの「個人的」「主観的」な印象の開陳が、文学研究のために一体どれほどの価値があるかということである。生来の鋭い勘に加えて経験が深まれば、そうした主観的な意見が正鵠を射たものになることは当然にありうるわけだが、しかしそのようないわば職人芸、名人芸的立場からの発言はしょせん仲間うちにだけ通ずるもの——学問が学問として自立するために必要な一般性客観性に欠けるものといわざるをえない。

文学研究に統計学を利用する目的の一つは、結論を先にいえば、この名人芸的なきびしい狭さを打破して万人に可能な研究方法、万人の納得できる研究結果を提供することにある。例えば Baldwin と Wright の文章の色合い、質について、これを単なる主観的印象としてではなく、客観的に「目に見える」ものとして検出しようとするならば、統計学は次のような方法を提供してくれるだろう。

すなわち、文章の色合いをきめる要素は単一ではないにしても、語い——使用されることばの数と質によって大きく影響されることは明らかであり、なかでも名詞、形容詞、動詞の使われ方いかんで文章の感じが大きく変わって来ることは論をまたないのであるから、例えば、ある作家の作品中で名詞がどのように使われているか——一回だけ使われる名詞、二回使われる名詞…… n 回使われる名詞が各何個ずつあるか、つまりそれぞれの名詞の頻度数を調べることによって原文の色彩、味わいをかなりの程度に検出しようと考えることができるのである。

このことについて、実際に Baldwin の *Another Country* (A Dell Book) と Wright の *Native Son* (A Signet Book) を採りあげて調べてみるが、も

もちろんこのとき、二つの作品中の全名詞を調査の対象にするのではなく、標本調査という方法を有効に利用することを考えなければならない。

すなわち、*Another* の 358 ページ、*Native* の 386 ページから大標本としての最低限をやや上まわる 60 個のサンプルを抽出することとし、両作品のページ数を一応 360 とおさえてこれを標本数で割った数、つまり $360/60=6$ ページごとの等間隔抽出法によって得た標本の調査結果は表 1 の通りである。

(抽出のための基ページは乱数表によって決定。)

Table 1.

f	<i>Another</i>			<i>Native</i>		
	(S_0) x	(S_1) fx	(S_2) fx^2	(S_0) x	(S_1) fx	(S_2) fx^2
1	647	647	418609	500	500	250000
2	166	332	55112	167	334	55778
3	97	291	28227	85	255	21675
4	39	156	6084	37	148	5476
5	27	135	3645	25	125	3125
6	15	90	1350	20	120	2400
7	14	98	1372	17	119	2023
8	11	88	968	19	152	2888
9	7	63	441	13	117	1521
10	8	80	640	9	90	810
11	8	88	704	5	55	275
12	4	48	192	5	60	300
13	2	26	52	6	78	468
14	3	42	126	5	70	350
15	2	30	60	2	30	60
16	2	32	64	4	64	256
17	2	34	68	8	136	1088
18	1	18	18	3	54	162
19	2	38	76	6	114	684
20	1	20	20	1	20	20
21	3	63	189	2	42	84
22	2	44	88	1	22	22
23	3	69	207	1	23	23
24	1	24	24	1	24	24

f	<i>Another</i>			<i>Native</i>		
	(S_0) x	(S_1) fx	(S_2) fx^2	(S_0) x	(S_1) fx	(S_2) fx^2
25	1	25	25	1	25	25
26	2	52	104	—	—	—
27	3	81	243	—	—	—
28	—	—	—	1	28	28
29	—	—	—	1	29	29
30	2	60	120	—	—	—
31	—	—	—	1	31	31
32	—	—	—	1	32	32
33	2	66	132	—	—	—
34	—	—	—	1	34	34
36	—	—	—	1	36	36
37	—	—	—	1	37	37
39	—	—	—	2	78	156
40	1	40	40	—	—	—
42	1	42	42	2	84	168
43	—	—	—	2	86	172
45	1	45	45	—	—	—
50	—	—	—	2	100	200
51	1	51	51	—	—	—
52	2	104	208	—	—	—
55	1	55	55	—	—	—
57	1	57	57	—	—	—
62	1	62	62	—	—	—
80	—	—	—	1	80	80
Total	1086	3296	519520	959	3432	350535

$$\bar{x}=3.03, \quad s=21.6$$

$$v=7.12, \quad K=47.5$$

$$\bar{x}=3.57, \quad s=18.5$$

$$v=5.15, \quad K=29.4$$

ちなみに、こうして母集団から抽出された n 個のサンプルについてある事象が x 回だけ起ったとすれば、その事象の相対頻度（つまり標本比率）は x/n であり、この標本比率の標準誤差は $\sqrt{p(1-p)/n}$ である。ここで p とは母集団比率であるが、われわれは標本比率 x/n を p の推定値として用いることができるから、 $n=60$ とし、*Another* の毎ページに一回だけあらわれる名詞を例として考えた場合、 $\sqrt{p(1-p)/n} = \sqrt{647/60 \times (1-647/60)/60} =$

1.26 となり、この標本調査が十分に信頼できるものであることが知られる。

さて、標本平均値 (\bar{x}) は $\bar{x} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^k f_i x_i$ の式で、標本平均値の分布のちらばり、つまり標本分散 (s^2) は $s^2 = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^k f_i x_i^2 - \bar{x}^2$ で計算されるので、*Another* では $\bar{x} = 3.03$, $s^2 = 469.1$ ($\therefore s = 21.6$)、*Native* では $\bar{x} = 3.57$, $s^2 = 344.6$ ($\therefore s = 18.5$) と検出される。

この \bar{x} と s とが、作品の色合いを知る当面の客観的資料となるのであって、例えば語が繰り返し使われる回数の平均値が大で、そのばらつきが小であれば、当然作品は内容的に均質であるとか単彩的であるとかいえるであろうし、逆に平均値が小さく標準偏差が大であれば、その作品はまとまりに欠けるかあるいは多彩な内容のものであるとか判じられるわけである。この観察は *Native*, *Another* 両作品における \bar{x} , s の比較検討に直ちにあてはめうるが、しかし場合によっては相対的に \bar{x} も s も大というようなケースも起りうるわけで、そうした様々なケースを一々ケースごとに判断するのではなく、どの場合にもあてはめうる判断基準が設けられるならば非常に便利であろう。

G. Yule が平均値に対する標準偏差の割合 s/\bar{x} を変化率 (v) と名づけて⁽³⁾ 措定するのはこの統一的尺度設定の第一段階としてだが、しかしこの変化率なるものは、結局当面の作品に使われていることばのいわば微視的な調査結果を利用するもので、その作家の持っている語い全体とはかかわりを持たないものであるから、個々の作品がつねに作家の文学世界全体との関係において考えられることが筋である文学研究のためには、いささか不満足なものといわざるをえない。

このために Yule は更に「特性」K なる尺度を案出するのであるが、その⁽⁴⁾ 考え方の大要はつぎの通りである。

(3) G. Udny Yule, *The Statistical Study of Literary Vocabulary* (Garden City, N.Y., 1968), p. 13.

(4) Cf. *Ibid.*, pp. 51-3.

作家が作品を書くために使用する語は、彼の知っていることば全体——彼の完全な語い——の中から選ばれるものではなくて、当然語いの中の一部は文学創作のために不向きなものとして切り捨てられると考えなければならない。従って問題になるのは、作家の内部に貯蔵されていて創作の必要に応じ使用される語——状況により作家がためらいなく使おうとする語（ある意味で作家の文学世界をつくり出す最も本質的なもの）であるが、いま作家によって使われるそうした語それぞれの使用頻度数を $\lambda_0, \lambda_1, \lambda_2 \dots \lambda_n$ とし、この λ 分布の平均値を $\bar{\lambda}$ 、標準偏差を σ_λ としてみると、上記の通り文学作品に関する限り作家の「完全な語い」(Cの記号で示す)とは、彼が「必要に応じ使用する語」と変りないということができるから、Cの中の各語の使用頻度数分布の平均値を M_C 、標準偏差を σ_C とすれば

$$M_C = \bar{\lambda} \dots\dots\dots (1)$$

となる。ところで統計学上のポアソン分布では、分散 σ^2 が平均値に等しいことが示されるが、現実的な事象の出現回数の分布を調べると、むしろ σ^2 は平均値よりつねに大である。⁽⁵⁾ 従って σ_C^2 は、平均値に更に、実際にその作品で使われた各語の分布の「ばらつき」の仕方、すなわち 2 次の原点積率 $\frac{1}{n} \sum_{i=1}^k f x_i^2$ (これを σ_λ^2 で表わす) を加算したものとなる。すなわち

$$\sigma_C^2 = \bar{\lambda} + \sigma_\lambda^2 = M_C + \sigma_\lambda^2 \dots\dots\dots (2)$$

更に変化率は
$$v_\lambda = \frac{\sigma_\lambda}{\bar{\lambda}} \dots\dots\dots (3)$$

いまこの (3) を M_C, σ_C の記号を使ったものに書き換えれば、それは作家の語い全体、つまり C と、実際に文学創作のために使われた語との関係を示すものになるだろう。すなわち (3) 式を 2 乗すれば、 $v_\lambda^2 = \frac{\sigma_\lambda^2}{\bar{\lambda}^2}$ となるから、これに (1) 式、(2) 式から導き出されるものを代入すると、

$$\frac{\sigma_\lambda^2}{\bar{\lambda}^2} = \frac{\sigma_C^2 - M_C}{M_C^2} \dots\dots\dots (4)$$

ある作家が自己の文学を創造するために内部の宝として所有している語の

(5) Yule, p. 45.

総数を W とし、彼がいまその中から $\sum_{i=1}^k f_i$ の語を用いて現実の一つの作品を書いたとすれば、前述の考察の通りこの $\sum_{i=1}^k f_i$ は（従ってまたそれに変数を掛けた $\sum_{i=1}^k f_i x_i$ も、更に $\sum_{i=1}^k f_i x_i^2$ も）この作家においては、まさに彼の全語いの中から選び出されたと等しいものになると考えてよい。つまり

$$M_0 = \frac{1}{W} (\sum f_i x_i)$$

また平均値のまわりの 2 次の積率、つまり中心積率（ここでは σ_0^2 で示す）は

$$\sigma_0^2 = \frac{1}{W} \sum f_i x_i^2 - \left(\frac{1}{W} \sum f_i x_i \right)^2$$

であるから、いま $\sum f_i x_i = S_1$, $\sum f_i x_i^2 = S_2$ とすれば、

$$M_0 = \frac{S_1}{W} \dots\dots (5)$$

$$\sigma_0^2 = \frac{S_2}{W} - \frac{S_1^2}{W^2} \dots\dots (6)$$

(4) 式の右辺に (5), (6) を代入すれば、

$$\frac{\sigma_0^2 - M_0}{M_0^2} = \left(\frac{S_2}{W} - \frac{S_1^2}{W} - \frac{S_1}{W} \right) \times \frac{W^2}{S_1^2} = \frac{W(S_2 - S_1) - S_1^2}{S_1^2} = \frac{S_2 - S_1}{S_1^2} W - 1$$

Yule は、この $\frac{S_2 - S_1}{S_1^2}$ が作品の「特性」の尺度になるものと考え、観察の便宜のためにこれを 1 万倍して K の記号を与えるのである。

つまりこの K は、文学作品の質を統計的な方法で示そうとすれば当然必要になる平均値、偏差、あるいは変化率等の相互の比較勘案を、単一の数値で一挙に示すものとなるが、一般的にいえば、 K の値が大であれば作品の主題は変化に富んでいるか、あるいはまた文体的に散漫な感じであるか⁽⁷⁾というようなことが考えられ、値が小の作品は、例えば語の使い方が集中的であるとか変化に乏しいとかということを意味し、また時には作品が色彩的にくすんだものであることを示すものであ⁽⁸⁾ったりするといえるであろう。

さて研究の本題に立ちかえり、*Another* と *Native* それぞれの K を検出してみると、前者では 47.5、後者では 29.4 で、*Another* の K は *Native* のそ

(6) Cf. 竹内清他編、『統計学入門』（有斐閣、1970）、pp. 26-7.

(7) Yule, p. 132.

(8) *Ibid.*, pp. 119-20.

れの1.6倍以上になることがわかる。ということは、Wright が主題、語の選択において集中的であるのに対し、Baldwin の作品は変化に富んだ主題と、装飾の多い一種華やいだ、別な見方をすれば晦渋な印象を与える文体を持っていることを示しているのであり、この章の冒頭で両作家の短文を比較したときの主観的な印象批評に客観的な裏づけが与えられたことになる。

万人とはいわないまでも、事実として多数の人間を納得させるに足る客観的な資料を提供しうるということこそが、文学研究に統計学を利用することの最大の利点なのである。そしてこの利点の故に、例えば J. Hollander のような「文学作品のおもしろさは、作品を構成する諸要素のもつ意外性——つまり、読者の“prior expectation”を裏切る工夫にあるといえるかもしれない、しかもこうした意外性は、統計的調査の対象にし易い繰り返される文体要素とは逆の、出現頻度の少い要素によって生まれるということもあるはずだ⁽⁹⁾」という、要するに統計的方法が質の差違を単なる量の差違にすりかえてしまいかねないことへの危惧⁽¹⁰⁾、あるいはまたそれ故に、この方法によっては最も決定的な美学上の問題が無視されてしまうに違いないという根強い不信感⁽¹¹⁾を他方に持ちながら、しかし特にこれまでの文学研究の主観性恣意性に飽きたらぬ人々によってなおしばしばこの方法が利用されるその理由なのである。

だが実のところ、上述のような種類の語い調査は、それをすすめて行く上で龐大な時間と労力を必要とするばかりでなく、それからえられた結果は、元来が用語面の等質、非等質だけにかかわるものであって、厳密な意味での作品の内的な質を明確にするものでないことは、まさに J. Hollander のいう通りなのである。

(9) Cf. John Hollander, "Retrospects and Prospects from the Viewpoint of Literary Criticism: Opening Statement," in *Style in Language*, ed. Thomas A. Sebeok (Cambridge, Massachusetts, 1964), pp. 405-6.

(10) Cf. Ullmann, p. 119.

(11) Cf. René Wellek, "Retrospects and Prospects from the Viewpoint of Literary Criticism: Closing Statement," in *Style in Language*, p. 417.

例えば上記の調査における最高頻数の語は、*Native* では “man”, *Another* では “hand” であるが、読書中そのどちらの語からも何ら特別の印象を受けはしない。印象——つまり、心に強く作用するということをいえば、*Native* ではまさに “fear,” “hate” (作品全体では決して少数ではないが、しかもなお抽出調査にすぎぬ “man” に比べて格段に小さい使用度数の語)こそが最も強く心に残るものであり、また *Another* では “despise” あるいはほとんどその反意語ともいえそうな “proud” をあげることができるであろう。心への働きかけが強いとは、作品という一つの世界がそれらの語を中心にして動いているということ、つまりそれらの語の中にこそ作家の最も根源的なものが塗りこめられているということであろうが、そうした本質的な語を見つけ出すのはもはや統計学の任ではなく、まさしく作品に対する信頼に根ざした主観的な観察⁽¹²⁾によらざるをえない。

いま、それぞれの作品において中核的に働くこれらの語を系統的にまとめ、更に Baldwin にはもう一つの作品 *Go Tell It on the Mountain* (A Dell Book) も加えて、それら三つの作品にあらわれる各語の全数を調査してみると(表2)、そのために要する時間と労力は、表1の場合の何十分の一かにすぎないばかりでなく、その結果は上述の主観的観察をかなりの程度に客観化し、更にそれを通して作家の内奥へ入って行く手がかりすら与えられることがわかる。

Wright における “fear,” “hate” 系統の語の圧倒的な使用量は、当時の彼の「抗議」の根源にあったもの——白人、黒人相互の間の深い憎悪と不信を正確に示していることは明らかだが、Baldwin が *Go Tell* で同じく多数の “fear,” “hate” を使う意味は、並べられた数字をいくら眺めても理解されない。それらの語が Wright におけるような対人間的なものではなく、宗教的な「罪」に対する怖れと憎悪であり、社会的であるよりは精神的倫理的なもの、いわば人間の内部を探りつつ掴みとって来たものであるということ

(12) Cf. Leo Spitzer, *Linguistics and Literary History* (N.Y., 1962), pp. 26-7.

Table 2.

Word	Another			Native			Go Tell		
	<i>fx</i>	sum	%	<i>fx</i>	sum	%	<i>fx</i>	sum	%
despise	22	45	36.5	4	44	11.2	2	17	11.2
shame (<i>n.</i>)	9			30			14		
shame (<i>v.</i>)	—			1			1		
ashamed	14			9			—		
fear (<i>n.</i>)	11	20	16.2	120	194	50.1	38	52	34.1
fear (<i>v.</i>)	3			19			6		
fearful (<i>ly</i>)	1			9			4		
scare	5			46			9		
hate (<i>n.</i>)	—	31	25.2	63	137	35.4	1	41	27.4
hate (<i>v.</i>)	21			74			29		
hatred	10			—			11		
proud	20	27	21.9	2	12	3.1	14	39	26.1
proudly	1			—			4		
pride	4			8			20		
dignity	2			2			1		

sum は同系統語ごとの計。

%は作品ごとの総計に対する sum の割合。

教えるのは、ただ作品の熟読だけなのである。

更に *Go Tell* で多く使われている “proud” 系統の語は、*Another* 中にも同じく多数見出されるのであり、このことから例えば “Her mother’s head had borne the weight of white folks’ washing, and it was because Ida had never known what to make of this fact — should she be ashamed of it, or proud? — that there mingled in her regal beauty something of the too quick, diffident, plebeian disdain. (*Another*, p. 124)” における “proud” 及び “ashamed” (更には “disdain”) の使い方をみれば、黒人作家 Baldwin の発言が彼の精神のいかなる部分を根にしてなされているものかが、かなり明瞭に推察できて来るのである。

おそらく彼の精神の中枢には、白人に対する「怒り」よりも黒人であるが

故に受ける「侮蔑」とそれに由来する「恥」の意識があり、しかしその侮蔑を越えて生きるために、何よりもみずから人間としての「誇り」を持たねばならないという考えがあるのだといえるように思う。エッセー集 *Nobody Knows My Name* (A Dell Book) の中で彼は次のようにいう。すなわち、ニグロが「北部では無視され、南部では監視される (p. 65)」理由はただ皮膚の色が黒いということのためなのであり、しかももし、その色が普通以上に黒ければ白人からはもちろんのこと、同じ人種の「黒人からさえも、さげすまれ、更には自分が自分を軽蔑し (p. 162)」すべてに恥辱を感じざるをえないという奇怪異様な環境の中で真に生きることを望むなら、その「黒い皮膚の裏にある普遍的な人間性 (p. 83)」をしっかりと見究め、みずからそれに誇りを持って行くこと以外にない—— Baldwin はこう述べるのだが、彼のこの考えを次章において更に別の側面から明らかにしてみたい。

Ⅱ

作家における文体とは、その作家の（精神的肉体的、また時間的空間的）遍歴、つまりもっとも広い意味での彼の閱歴を誠実に反映するものであるといえる。⁽¹³⁾ 表 2 の分析はこのことについての一例を示したものであるが、文体と作家内部との密接な関係を考えるならば、今度は上述の操作を逆にして、まず作家の思想を全体的に把握しておいてから、それが彼の文体上にどのようなかたちで投影されているかをみることも可能であるように思われる。すなわちこれは、Spitzer のいわゆる macroscopic なものから microscopic なものへと移る操作に⁽¹⁴⁾類似したものであるが、そうしたいわば逆方向からのすすめ方も真であるかどうかの検討も含めて、研究の次の段階へ進んでみよう。

Baldwin によれば、「作家の重要性とは、人々が忙しすぎて describe しないことどもを describe すること (*Nobody*, p. 125)」なのであるが、彼が使

(13) Cf. Spitzer, p. 11.

(14) *Ibid.*, p. 91.

うこの「忙しすぎて書けない」ということばの真意は、いまのアメリカ社会が人々の理解を越えて救いがたく混乱し、いわば “enormous puddings” (*Nobody*, p. 124) のようなものになっているのだということ、もっと詳細に言えば、アメリカ社会での「掟」が、ただ「白人社会の犯罪的な利益と安泰を守るために (*Nobody*, p. 62)」, あるいはまた、白人たちの幸福を測定するための “a fixed star,” “an immovable pillar” (*The Fire Next Time*, A Dell Book, p. 20) にするために黒人を「人間」としては決して遇しないということなのであるが、しかしその掟の故に黒人はもとより、他の人間性を無視したことの当然の報いとして白人みずからが彼らの identity を喪失してしまい (*Nobody*, p. 66), その結果いまやアメリカという国全体が巨大な incoherence と化し果てて、人はもはや特別な決意をもってでなければこの混乱の中から真のアメリカを救い出すことができない、という意味なのである。

ところで Baldwin におけるこの特別の決意とはどんなものであろうか。それは何よりも先ずきびしく「自分をみつめる」ということであったといえる。10年にわたるヨーロッパへの自己追放の涯に彼の得た認識は、自分がまさにアメリカ人以外の何者でもないこと、そしてアメリカという祖国を何よりも愛しているということであった。⁽¹⁵⁾この認識の上に立って、Baldwin はこの国を愛するすべての者、だがいまや自己の identity を失っているすべての者が、アメリカとそしてアメリカ人である自分を救うために、今こそきびしく自己を見つめなければならないと考える。⁽¹⁶⁾つまり、そうした「自身に向ける問いかけが、結局は世界を明らかにすることであり、また他者の経験を理解する鍵になる (*Nobody*, p. 13)」のであって、この自己凝視を経てはじめて白人は真にニグロの「過去」の意味を理解でき、そこに人間としての黒人を見、一方黒人もまた自分の過去を踏まえつつ、自分の人間性に誇りを持ち、自分を愛することをおぼえ、しかもその自己愛を他者の人間性への愛

(15) Cf. *Giovanni's Room*, p. 50.

(16) Cf. *Nobody Knows My Name*, p. 99.

へと変えて行けるのだというのである。

別様にいえば、これからのアメリカを救うものは、ただ厳しい自己凝視から始まるもの——つまり、黒白共に自己内部の暗闇の中に押しこめてひた隠しにかくし、あるいは目を閉じてそれが存在することを敢えてみずから認めまいとしているところの、そうした醜く悲惨なものに対する厳しい凝視から始まる自他の人間性の愛だけであるということなのだが、作家としての Baldwin における決意は、そうして隠されているもの、秘められているものを白日のもとにさらけ出して直視するだけではなく、更にそれらを一つにまとめ、「ことば」によるかたちを与えつつ世界の経験と化せしめることでなければならない。実際、人すべてがこの自己を見つめるという努力をしないならば——と Baldwin は考える——世界とはついに、人間の棲息しえぬ暗黒⁽¹⁷⁾にしかすぎないであろう。

つまり一口に言って、現象の背後にあるものにまっすぐな視線をあて、それを外に引き出して説明を与えること——これが Baldwin の作家精神の中核をなしているといえるであろうが、そのことを先ず頭に入れた上で次に彼の文章の構成の仕方——つまり現実（その過去、現在、未来）の陳述の仕方を、いわゆる文連結接続詞の使い方という面から調べてみたい。（ここでいう接続詞には、いわゆる接続副詞のほか、副詞節を導く関係副詞 when, where 及びその派生語をも含めるものとし、更に次の四項目を付加条件とする。すなわち、(1) 接続詞の分類はそれぞれの「意味」機能によるものとする。(2) “and” の機能については、意味論的立場から「整合」「反意」「因由（又は結果）」の三つに分けて考える。⁽¹⁸⁾(3) 関係代名詞をも接続詞とみる説はとらない。従ってここでの名詞節とは that, whether, if, etc. に導かれたものだけを言い、関係代名詞（及び上記条件以外の関係副詞）の導くものは含めない。(4) I know he did it. に類する文は、従属節が主節の「内容」を示すという両者の関係を重視するため、発生論的な論議は一応抜きにして、

(17) Cf. *Another Country*, p. 98.

(18) Cf. 中島文雄, 『意味論』(研究社, 1966), pp. 200-6.

接続詞 that の省略されたものとして取り扱う。)

Table 3. *Go Tell*

Classi- fication	$f(x)$	$S(fx)$ from Bottom
制 限	10	3956
目 的	10	3946
同 格	14	3936
場 所	21	3922
選 択	25	3901
結 果	28	3876
分 離	30	3848
譲 歩	47	3818
比 較	73	3771
条 件	114	3698
様 態	163	3584
因 由	219	3421
反 意	375	3202
時	496	2827
内 容	598	2331
繋 合	1733	1733

$$3956 \times 0.9 = 3559.4$$

Table 4. *Giovanni's*

Classi- fication	$f(x)$	$S(fx)$ from Bottom
場 所	1	1621
目 的	1	1620
制 限	2	1619
譲 歩	2	1617
同 格	19	1615
結 果	24	1596
比 較	25	1572
分 離	32	1547
選 択	35	1515
条 件	54	1480
様 態	71	1426
因 由	75	1355
反 意	171	1280
時	173	1109
内 容	373	936
繋 合	563	563

$$1621 \times 0.9 = 1458.9$$

Table 5. *Another*

Classi- fication	$f(x)$	$S(fx)$ from Bottom
目 的	2	3461
譲 歩	7	3459
場 所	9	3452
制 限	14	3443
選 択	29	3429
分 離	35	3400
同 格	36	3365
結 果	40	3329
比 較	70	3289
条 件	87	3219
因 由	158	3132
様 態	185	2974
反 意	332	2789
時	336	2457
内 容	434	2121
繋 合	1687	1687

$$3461 \times 0.9 = 3114.9$$

三つの作品に共通していることは、それぞれの作品で使われている文連結接続詞全体の 90% にあたる数を覆うもの、つまりその作品の文体を接続詞という側面から眺めたときに、その面での文章の色合いをほとんど決定してしまうと考えられるものが、繋合、内容、時、反意対照、因由、様態の 6 種に限られるということである。従って、いま「繋合」「内容」(更に「時」も仲間に入れてよいだろうが)を意味する接続詞を、通常的な英語文章上のいわば neutral word⁽¹⁹⁾——文体的に無色のものであるとすれば、Baldwin の文連結の仕方は、主として「反意対照」「因由」「様態」の三つの接続詞によっ

(19) Cf. Yule, p. 21. もちろんこれらの接続詞が、つねに neutral word であるのではなく、作家が特定の意図のもとに使えばそれはたちまち一つの重要な文体要素となる。Bible, Hemingway の作品における polysyndeton, 特に Hemingway における “and” の文体的価値に注意。

て特徴づけられていると考えることができる。

だがこれだけの観察結果では、それらの接続詞が彼の精神とたしかにつながりを持ってあらわれたと判ずるのにいささか資料不足であろう。同じ調査が他の作家についてもなされ、それと比較検討することが当然ここで要求される。

例えば Wright の作品からはどういう結果がえられるであろうか。

Table 6. *Native*

Classification	f_x	$S(f_x)$ from Bottom
場 所	16	5914
結 果	29	5898
制 限	30	5869
分 離	36	5839
同 格	37	5803
目 的	49	5766
讓 歩	53	5717
選 択	79	5664
様 態	169	5585
比 較	170	5416
因 由	196	5246
条 件	325	5050
時	680	4725
反 意	725	4045
内 容	1120	3320
繫 合	2200	2200

$$5914 \times 0.9 = 5322.6$$

とができるであろう。

She was white and he was black ; she was rich and he was poor ; she was old and he was young ; she was the boss and he was the worker. (*Native*, p. 122)

He lay on the cold floor sobbing ; but really he was standing up

Wright では先ず「反意」の数値の大きさに目をひかれるが、それは「因由」の4倍近くに達する (Baldwin では2倍前後) ばかりでなく、「時」の数値をさえも凌駕していることに気づく。当然、Wright においてこの「反意」接続詞は作家のある意図を荷ったもの——作家の内面のあるものを反映した語であることを推測させるのだが、次にあげるような文を読むと、そこに、人間の心の温かさを確認したいと願いつつしかも上滑りな甘ったるい友愛主義などは全身的な力で拒否し、むしろ恐怖と憎悪の壁越しに黒人としての感情を白人に向かって投げつけてやることを選ぶ、Wright という黒人における厳しい白人との対決の姿勢——当時の彼が持っていた黒人と白人の永遠の「対立」という意識が、はっきりあらわれているのを見るこ

strongly with contrite heart, holding his life in his hands, staring at it with a wondering question. He lay on the cold floor sobbing; but really he was pushing forward with his puny strength against a world too big and too strong for him. He lay on the cold floor sobbing; but really he was groping forward with fierce zeal into a welter of circumstances (*Ibid.*, p. 288)

つまり、Wright の「反意対照」接続詞の群を抜いた量は彼の対立意識——抗議姿勢の明らかな反映と見ることができるが、そうした目でひるがえってもう一度 Baldwin の接続詞を眺めてみると、今度は逆に「反意」の数自体よりもそれとの比較における「因由」の相対的な大きさに目をとめざるをえなくなる。ということは、眼前の事象に反省を加え、その背後にあるものを探り出し、その因果関係を通して一つの事実の完全な姿を明らかにするために機能するこの「因由」接続詞こそが、「隠されたもの、秘められたものを白日のもとにさらけ出し、世界の経験と化せしめよう」とする Baldwin の、その精神を反映したことばの一つなのだと考えさせるということであるが、*Another* の中には次のような一文も見出されるのである。

... he had not known because he had not dared to know. There were so many things one did not dare to know. And were they all patiently waiting, like demons in the dark, to spring from hiding, to reveal themselves, on some rainy Sunday morning? (p. 331)

つまり Baldwin はこの因由接続詞を駆使しながら、人間の（単なる黒人のではない）精神のもつ強さ弱さ、美しさと醜さをあらわにする *Go Tell* から、人間の（ただに白人のではない）肉の交わりがつくり出す哀しくあさましいほどに強い愛のきずなについて語る *Giovanni's* を経て、霊と肉と、黒人と白人とが相互に錯綜し合い、そのどれもがただ「人間として」生きる道を探して暗ら闇からもがき出ようとあがく様を描く *Another* に到達したともいえるであろう。

一般的に言っても、作家がその目に映った人生の一断面をただそのままに

描き出してみせようというのではなく、まさにそうした断面のあらわれ来たった理由——つまり、一つの事実を根底において捉え、理解することに重きを置こうとするならば、彼の陳述には因由的な表現が多くならざるをえないはずだが、アメリカで黒人が作家になるということは、とりもなおさず彼が、彼を取り巻く現実——アメリカ社会の不条理を誰よりもきびしく直視しなければならぬということであり、更に（それについての意識の深浅に違いはあっても）その不条理の覆いを取り去って、現実をはっきりとした原因結果の関係で捉えなおし、根底的な真の理解を自他に与えねばならぬということなのである。従ってそのことは、ビガー・トーマスの恐怖と憎悪に満ちた短い生涯のルポルタージュともいえそうな *Native* においてさえはっきりあらわれていることなのであって、*Native* での因由接続詞は、ビガーが自分の殺人行為の背後にあるもの、自分にすらはっきりつかめないものを明らかにしようと苦悶する部分、そしてもちろんこの犯罪の背景を探り出そうとする法廷場面、つまり作品の終末部の六、七十ページになって急増するものであることが観察されるのである。

This is life, new and strange; strange, because we [white people] fear it; new, because we have kopt our eyes turned from it.

(*Native*, p. 359)

我々は先ず、黒人文学というものが、作家にこうした精神的努力を強いるところの土壌から——言いかえれば、アメリカという国で、現にニグロが人間として取り扱われていないという紛れもない事実を根にして生れたものであることを、もう一度確認しておかなければならないだろう。さもなければ我々は、「米国への愛」をいう Baldwin をただの同化主義的黒人エリート、白人世界での黒人模範生にすぎぬというような取り違い方をしかねないのである。

たしかに Baldwin は Wright の “fear” と “hate” を捨てて人間としての「愛」を説く。だがそれは、白人社会の示す非人間性に対する黒人と

しての根源的な「抗議」を捨てたということではないのだ。ただ、抗議が Wright 的にひたすらな直線的かたちをとりつづけるならば、その「抗議」は結局黒人種の特異性だけを強調する結果になるということを彼は最も怖れるのである。つまり、それは場合によっては黒人を永遠に特殊化するという深刻な矛盾を内包するものであるが故に、Baldwin は、白人に対したただ一つ、黒人もまた「人間」であり、世界には「人間」しか存在しないという単純な事実を見据えよと求めるのだが、しかし自分のこの考えに従って書いた作品、例えば皮膚の色を抜きにした所での人間の魂の遍歴について述べる *Go Tell* においてすら、彼もまた黒人に「対立」するものとしての白人の社会を極く一部にだか提示しつつ、現実的に白人を弾劾していることを見落すべきではあるまい。言ってみれば、彼は白人に対する協調と反撥の境い目に立っているのであって、そう考えれば表3～5の「反意対照」は、まさに彼におけるそうした姿勢に照応するものであろうことが理解されて来るのである。

さて以上のように考察して来れば、我々は Baldwin における「因由」接続詞が、この作家が黒人であるが故に抱いた「事象の背後の剔抉理解」という思想に正確に対応するものであるとの確信を一層深めうるように思うのだが、⁽²⁰⁾しかしここで更に、黒人を取り扱った白人作家の場合はどうかのデータも集めそれとの比較がなされるのでなければ、判断になお偏りがあるといわれることになる。

調査の対象として、Faulkner, *Light in August* (A Penguin Book) のクリスマス章、つまり5, 6, 7, 8, 9, 10, 12の各章と第14章の後半部、合わせて約125ページをとりあげてみると、結果は表7のようになる。

接続詞の種類だけをみれば、全接続詞の90%を覆うものが Baldwin と全く同じという結果になる。だが Faulkner の「因由」を質的に調べてみると、明快に二つの事象の因果関係を示そうとする Baldwin の因由とは全く

(20) 紙数の都合で割愛せざるをえないが、各作家における関係詞(特に secondary としての関係詞)の数量的比較からこのことは裏書きされる。

Table 7. *Light in August*

Classi- fication	<i>fx</i>	S(<i>fx</i>) from Bottom
同 格	6	2103
制 限	6	2097
目 的	8	2091
場 所	11	2083
結 果	12	2072
選 択	14	2060
分 離	26	2046
譲 歩	33	2020
比 較	45	1987
条 件	55	1942
因 由	98	1887
様 態	185	1789
反 意	241	1604
時	309	1363
内 容	363	1054
繋 合	691	691

$$2103 \times 0.9 = 1892.7$$

異なるものであることがわかる。Faulkner においてそれは、ある事象（人間意識も含めて）の心理的な敷衍、一層の展開の契機とでもいうようなかたちで使われるのであり、そこには何かあいまいな混沌とした感じ、あるいは二つの事象をつなぐものはただ不安定な心理の懸け橋だけとでもいうような感じがあるといえるのである。

His mouth said it, because immediately he wanted to unsay it.

(*Light*, p. 136)

... he goes to sleep without knowing it [= going to sleep], because the next thing of which he is conscious is a terrific clatter of jangling and rattling wood and metal and trotting hooves. (*Ibid.*, p. 253)

こうした “because” の用法をみると、外在（事象）と内実（心理的原因）の関係は決して明確に割り切れるものではないが、しかしまた、ある外在が人間の行為の結果によるものである限り、それと人間心理——意識の間には何らかのつながりがあることもたしかなのだと言っている Faulkner 自身の声を聞くような思いもするのである。

こういうように Baldwin と Faulkner との因由接続詞の使い方には明らかな違いがあるのだが、更に Faulkner での「反意対照」接続詞については、Wright のビガーがそうであったような主人公の反抗的性格との関係よりも、むしろ「コントラストの効果」という Faulkner の美学に深くかかわ⁽²¹⁾ってあらわれたものという考えも可能なのであり、あるいはまた次のような

(20) Cf. 拙論「多様ななかの統一——*Light in August* について (Ⅳ)」、『アメリカ文学研究第7号』（日本アメリカ文学会、1970）。

文をみても、そこに示されるものはクリスマスの「反抗の強さ」であるよりは、はるかにその「挫折感の強さ」であるということがいえるように思われるのである。ビガーは反抗のために死んだが、クリスマスは自己の identity をついに見出せなかったというその挫折のために死んだというべきであろうか。

Through during the last seven days he has had no paved street, yet he has travelled further than in all the thirty years before. And yet he is still inside the circle. 'And yet I have been further in these seven days than in all the thirty years,' he thinks. 'But I have never got outside that circle' (*Light*, p. 255)

一方, Wright では統計表の上方に位置する (つまり数として少い) が, Faulkner と Baldwin では共通して下方に位置して文の色合いの決定に大きく影響している接続詞に注意したい。すなわち「様態」の接続詞であるが, Faulkner の文章にみられる強く ポエティックな傾向を考え合わせるとき, Baldwin におけるこの接続詞の多用も同じく彼の詩的な資質を示すものと考えて間違いないであろうし, 比喩的表現を頻用すれば当然に文章は華やかなものになるのであるから, 第 I 章で分析した Baldwin の多彩な文章ということが, この面からも証明できることになるはずである。

結

とはいえ, 先述したことの繰り返しになるが, 統計的数値は Faulkner, Baldwin の「様態」について, これ以上の何ごとも明らかにしない。すなわち, 作家それぞれにおける「様態」の具体的な示し方, つまり作家の詩的傾向の質的差違については, それはもはや何も語ろうとはしないのである。一言にしていえば, さまざまなエレメントが皮相な同一性のもとに一括されてしま⁽²²⁾うということでもあるが, またこれとは逆に——しかし結局は同じ意味のことをただ裏返しにいうだけのことであろう——統計学は, その調査を

(22) Ullmann, p. 119.

精密なものにしようとするほど個々のエレメントにのみ強くかかわることになる——つまり全体の中の細分された一部にだけ視線が限られて、いきおい全体的なパースペクティブを持つということから遊離して行かざるをえなくなるのであって、これが文学に統計学を利用するときにあらわれる最大の欠陥なのである。従って例えば、語い調査をもって「全体」理解のための真に納得の行く資料たらしめようとするならば、単に名詞、接続詞と言った一、二のものについてだけではなく、少くとも作品にあらわれる全ての品詞について調査するという、ほとんど不可能なことが求められることになるわけだが、しかし我々が文学研究に統計学を利用するのは、それによって研究の完全無欠な資料をえんがためではなく、ただその作家の内奥へ入って行く手がかりを得ること、つまり一人の作家の文学的語いの Liability についての情報をえるためなのであり、事実われわれのこの要求が、統計手段を通してかなりの程度に満足させられるということに注目しなければならないであろう。